

水明インターネット句会（選句・選評）															
令和七年八月															
15	14	13	12	11	10	9	8	7	6	5	4	3	2	1	
瞳人	たか子	楽	あらか		山凡士風舎梗舟	佳月土璃暦文かれん		癒香	加里	楽		暦文	ひろし		
待ち兼ねしそよ風きたる九月かな	路地奥に救急車居る残暑かな	邂逅の握手に滲む珠の汗	ガードマン笑顔でお辞儀油照り	短冊の「世界平和」や星逢ふ夜	猫帰る背中の残暑延ばしをり	葭すだれ揺れる京都の二寧（ねん）坂	烈日の注ぐ八月十五日	葉擦れ音軒端に微か七夕祭	やみくもにダブルクリック炎暑かな	デジタルの数字変はるや稲光	幼少期怖し楽しのかみなり様	蕎麦の花木曾の三日は車中泊	所在無く過ごす一日金亀虫	川涼し避けられぬのは水溜まり	石川順一
秋谷風舎	高原ひろし	衛	ありぎりす	雪待月田猫	神谷たくみ	里谷光義	破れ蓮	夢月	岩本展平	森佳月	宇田靖之	しーしー	檜鼻ことは		

30	29	28	27	26	25	24	23	22	21	20	19	18	17	16
あらか	しーしー たくみ	しんい ひろし 幹子 山菜		幹子	彩香 直子			梗舟	凡士 風子 展平 順一	六弦 土璃	佳月 町子 田猫 加里	ことは 瞳人 米山 ひろし たか子 山菜	高 原 思 舎 たぐみ 喜夫	土璃 町子 光雲2 音思
かなかなの道かなかなの続く午後	軽トラの西瓜わんさか傾ぎゆく 蝸の声に包まれた、うるさくも静かな午後、 麦わら帽子の人がゆつくりと道を歩いていく姿が目につかびました。	いまひとつこぶしの足らぬ盆甚句 「わんさか」と「傾ぎ」に　いいね！を。わんさか。がいいですね。	あれこれと枕辺さぐり熱帯夜 年季が足りず今一つなんでしょう。か。楽しい盆踊りの風景が見えま した。やはりこぶしがむずかしい！	アロハシャツの腕を差し出す診察室 心地好いユーモアを感じました	ウィンナの蛸箸で刺す敗戦日 母の作ってくれた弁当の懐かしい赤い蛸ウィンナー、箸で刺すの措辞 が終戦日に響き映像が生々しく素晴らしい。人間は残酷です。	白球を追ふ喚声や雲の峰	あきあかね飛びて飛び交うあきあかね	緑蔭に数多ちひさき忘れ物 ちいさきが良い。	ソーダ水奇跡はきつと泡のなか ぐずぐずしているとソーダの泡は無くなつていきますよ。奇跡を信じる 少年の心、あの頃にまた戻りたい。しやれる、詩的飛躍が。泡の中に 有る奇跡に対する確信。ソーダ水に対する信仰心が感じられます。 「きつと」に作者の思いが伝わりますし、飲むだけじゃない楽しみも 伝わって来ます。	朝顔を咲かせ無人の駐在所 いろいろ想像が膨らむ楽しい句です。朝顔が、おまわりさんを待つて いるようです。	吾を抱く母はモンペや終戦忌 昔のお母さんはいつももんぺ姿で忙しくしてましたね。戦後80 年、セピア色の写真のお母様のもんぺです。平和を願います。戦乱 の中、日本は今も平和でお母様のことへの感謝が込められた句。モンペの ダブルミーニングと血が繋がりがの隔世の感が味わい深いです。	切り分けて端取る母の西瓜かな 自分ほ控えめに端で済ませる母、しみじみと心に残る一句です。これ が親ごころ。母親は何でもそうだった。母の愛情が満ち満ちている 所が良い。いつも母さんこうしてた！	桐一葉小さき嘘つき友見舞ふ どんな嘘だろうか、どういふ事情なのかと色々と想像させるところが 良いなと思えました。作者の優しい気持ちと伝わってきた。季語と情 景が良くあつて「小さき嘘」が効いています。人の優しさが溢れていま す。心が震えます。	梯梧燃ゆ遠流の島の白灯台 白と赤が鮮やかに立ち上る。梯梧の花、白い灯台、流人の譜かい哀 しみが伝わってきます。遠い昔に思いをはせている気持ちを感じられ ました。
石関六弦	一駄歩	青木鶴城	みづる	石井直子	森下山菜	立野音思	横井あらか	岩清水彩香	瞳人	くるみ	河野凡士	荒一葉	新 暦 文	しんい

45	44	43	42	41	40	39	38	37	36	35	34	33	32	31	水明インターネット句会（選句・選評） 令和七年八月
みづる	佳月 直子 総太郎	順一	米山	高原					瞳人 総太郎	光雲2 かれん	喜夫	光雲2 みづる	高原		
終戦忌また読み返すはだしのゲン 年々遠くなる戦争の時代、残酷な歴史を忘れてはならない。	西瓜割り面でだめなら胴払う 西瓜のありかを探す様子が上手く出ています。以外と割るのは難しいですね。	売り切れのアイスコーヒー販売機 失望感が伝わって来るのですが、アイスコーヒーを飲みたくなるような環境、炎暑とか極暑とか炎天下、熱風なども伝わるような句だと思えました。	遠くより行商のこゑ秋澄めり 懐かしい行商の声が思い浮かぶ。	鶴谷南北のホラー作品夏芝居	灼ける地に名も知らぬ花の数多	秋寒やコーヒー淹るる昼下がり	炎帝や影の旋律タクト振り	実家じまい崩すや考の作り淹	米はもう半合でよい残暑かな 猛暑、半合で十分…。	爆心に無言の祈り広島忌 原爆の犠牲者に捧げる無言の祈りが表れています。	化粧坂休む木の根の虫なけり 人も少ない化粧坂虫が鳴いている、鎌倉の秋良いですね。	新涼や花屋に水の匂ひせり 初秋の花屋の花の香りは、まさに花を通した水の匂いであるかのように清々しく感じたのであろうか。	雑居ビル店名変わり夏燕	夏休み疲労困憊寄る家族	
大越マーガレット	岡崎梗舟	平野楽	邦治	小野町子	霜里	総太郎	絵夢	小林土璃	加非加里	龍野ひろし	岡本たか子	かれん	いさむ	和田イチ子	

60	59	58	57	56	55	54	53	52	51	50	49	48	47	46	水明インターネット句会（選句・選評） 令和七年八月
たか子			風舎 幹子 癒香	しんい		凡士 くるみ 絵夢	しーしー		梗舟 喜夫	暦文	六弦		田猫		
少年はあばら光らせ夏の川 はるか昔を思い出させる懐かしい句である。	噴水へ花の小路や青とんぼ	児の口へ溢す優しき冷奴	海鳴りは地球の鼓動海猫（ごめ）渡る 地球の鼓動が海鳴りであるとユニークに詠んだ。壮大な景が浮かんでくる。地球の鼓動の表現が良い。	端無くも身ほとりに知る秋意かな 暑さの中にも盆過ぎともなれば多少気配は違うでしょうね。	商店街鼻をくすぐる新茶の香	パスワードどれがどれやら蚯蚓鳴く 私も同じですが、最近のタツチだけのカード決済はもつとこわい。季語の設定がお見事！！何でも認証、認証！時代の要請だが、ご同感！	雷鳴に襟元すこし掻き合はす 中七下五の怖さの表現がいいですね。	湯を動き湯の皺作る極暑かな	夕まぐれ路地の残暑にもぐり込む 秋になるとそうですね。夕暮れの路地の残暑は少しひんやり、もぐり込むが秀逸です。	桐一葉村に二人の同級生 とうとう田舎は過疎化の極み。	向日葵の元気をもらい行く歯医者 そこに向日葵があるだけで元気出ますね。	指切りの天神平星月夜	星降る夜ふたり願ふはひとつなり 結婚したいカップルか、子どもが欲しい夫婦か、親友か。ほのぼのの想像させる句。	磯の香に海は見へねど大花火	
ありぎりす	雪待月田猫	夢月	里谷光義	破れ蓮	宇田靖之	岩本展平	森佳月	石川順一	しーしー	檜鼻ことは	佐藤幹子	染谷風子	癒香	持永喜夫	

水明インターネット句会（選句・選評）															
令和七年八月															
75	74	73	72	71	70	69	68	67	66	65	64	63	62	61	
	総太郎					展平 くるみ	ことは しんい かれん		楽 彩香 絵夢	風子 音思 あらか			直子		
ひまわりの切り絵あざやか鬼教	ワンサイズ大きめコーデ牛蛙	日本荒廃ひめむかしよもぎの更地	水に落つ蛍飛ばせし誓子が句碑	ひぐらしやホームに傘の忘れ物	爪立ちて風鈴吊れる子の真顔	米朝のさはり法話に盆の僧 粋な坊さんだ！頭のやわらかい御坊様、法話もさぞかし魅力的かと・・・。	広島に雨をみている終戦日 戦争の記憶と平和への祈りが静かに伝わってきます。黒い雨の記憶。広島にとつて終戦日は重いものだったと感じます。	朝顔かと夕顔の鉢家づとに	棒高跳びのポールのしなり雲の峰 季語の取り合わせがいいと思いました。映像が潑刺と、高く高く浮かび、上五の字余りさえも高さに響く。「棒高跳びの」「の」は省いても！	秘湯には我とおまえと赤蜻蛉 山奥の秘湯で奥さん（恋人）と秋を満喫、羨ましい限り。ここまで言い切るのには本心ゆえの思い切りの良さなのか、それとも大きな嘘なのか、できれば本心であつて欲しいと思いました。子育てを終えた夫婦の静かな旅とも読めますが、幼馴染の男性二人が秘湯で再会し、赤蜻蛉に子供時代を重ねる情景も浮かびました。季語が過去と現在をつなぐ橋のように感じられます。	夏草の蔓延る留守の庭となり	待ち兼ねし秋秋らしくなかりけり	一人居や朝顔開き飯蒸ける 日々の暮らしへの感謝を感じます。	秋立つや手洗いで干すぬいぐるみ	神谷たくみ
立野音思	石井直子	森下山菜	瞳人	横井あらか	岩清水彩香	河野凡士	くるみ	しんい	荒一葉	新 暦文	衛	秋谷風舎	高原ひろし		

90	89	88	87	86	85	84	83	82	81	80	79	78	77	76	水明インターネット句会（選句・選評） 令和七年八月
		町子				しーしー	六弦	ことは 一葉	展平 山菜	癒香	みづる			たくみ	
年毎に値の上がりゆく今年米	墓しまう夫婦や八十の秋彼岸	百日を務めて零る百日紅	秋涼しカレーのバジルに生まれ	木漏れ日に舞ふ影降りぬ黒揚羽	稲刈つてぼつちの案山子かくれなし	秋の虹櫓大樹に足かけて 櫓を土台にアーチを掛けているのです。	今朝の秋捲るページの軽きこと 季節の変わり目に気づいた瞬間。	秋立つやカステラ厚く切り分ける 具体的で素朴な生活の場面ですが、「秋」と結びつくことで、日常が少し特別なもの感じられます。季節の移り変わりと共にカステラを厚く切るとは繊細な感覚。	蝸螂や目を逸らしたる方の負け ありそうだね。だいたいこちらが負けでした。	打ち水の掛け合いはしゃぐ路地の子等 子供達のはしゃぐ姿がありありと浮かぶ。	送り火や親子で昇る一つ星 親子で一つの星となって天に昇るという意味だろうか、深い意味がありそうで氣にかかる。	綺羅尽くし必ず終はる大花火	手筒花火揚げ手や火傷見せあへり	一切を任せぬ老母盆用意 老母の性格、しゃきしゃき感が良く出てます。	
邦治	総太郎	霜里	加非加里	絵夢	小林土璃	かれん	龍野ひろし	岡本たか子	石関六弦	いさむ	和田イチ子	みづる	一駄歩	青木鶴城	

105	104	103	102	101	100	99	98	97	96	95	94	93	92	91	水明インターネット句会（選句・選評） 令和七年八月
								田猫 加里	一葉		順一	一葉 彩香	風子 絵夢	くるみ	
							茹でたての枝豆甘く濃きみどり	この平和いつまで続く穴惑ひ 前向きで、潔い句。清々しい。情報の移り変わりの早さが肌感で感じられました。	「この平和いつまで続く」という措辞は平凡だが、季語の「穴惑ひ」の幹旋が手柄。	きゅきゅつと茄子の浅漬け美味なりて	汗しとど体を変ふるジム通ひ 「体を変ふる」に強い意志が感じられます。ジム通ひは大変でしょうが、句作も引き締まってくるような、そんな展望も感じられ好ましいと思いました。	蟋蟀や泣き虫の追う姉の背 姉の背を追う弟の姿が見える。泣き虫と季語の蟋蟀の取り合わせも面白。泣き虫だった姉を追いかけてばかりの幼き思い出が蟋蟀の声に響きます。	油照り大気が肩にのしかかる 油照りの実感がよく出ています。季語を詠っているだけだが、措辞が一つ突き抜けている感じ	紅花や紅に隠れし棘ありて そうなんですね。知りませんでした。	
							佐藤幹子	持永喜夫	染谷風子	癒香	平野楽	大越マーガ レット	岡崎梗舟	小野町子	